

特定非営利活動法人

宮入
慶之助
記念館



宮入慶之助記念館だより 第23号

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館

2016(平成28)年 3月31日発行

「顧みられざる熱帯病(NTD)」

名誉館長 多田 功

昨年10月、北里大学の¹大村 智さんがアイバメクチンの発見でノーベル賞を受賞と決定したことは、皆さん記憶に新しいと思います。この抗生剤がオンコセルカ症という殆ど誰もご存じないが、熱帯では失明を起こすことで悪名高い寄生虫病の治療に有効だったのです。それはこの疾患が中央アメリカで発見されて丁度100年目を飾るにふさわしい快挙でした。

このオンコセルカ症とか、象皮病を起こすフィラリア症、睡眠病と言われるトリパノソーマ症、マラリア、それに宮入・鈴木がその感染経路を発見した住血吸虫病、皮膚に潰瘍を作るリーシュマニア症などは永く広汎に熱帯地域に流行していました。これらは地域住民を苦しめるのみならず、19世紀以降熱帯地域を植民地化し始めた欧米の兵士や植民者達の健康を大きく損ねるのです。例えば西アフリカは「白人の墓場」と呼ばれる程、多くの熱帯病が猖獗する地域でした。このため20世紀に入って西欧ではこれら寄生虫病は熱帯医学のメインな研究対象となったのです。

糖尿病とか、心臓病、高脂血症を治療する薬は商業的な利益が莫大なために、製薬会社は競ってその開発をしています。これからは認知症や精神薬の薬が加速的に作られるでしょう。他方これら熱帯地域に流行する疾患の治療薬は全く商業性が無いために、罹患人口は巨大なのにその開発は極めて遅れています。そのためこれら熱帯病について世界保健機関WHOは「顧みられざる熱帯病(NTD)」という概念を提唱し、治療や予防に対する防圧活動や創薬に世界的な援助を求めています。これに答えて先進国の企業、個人、慈善団体なども協力をしています。しかし十分ではありません。

高度成長の時代が去り、高齢化社会に向かう日本は今後経済的な繁栄はもう期待出来ないでしょう。それに代わって大切なことは知的財産を涵養することです。教育を重視して、優れた人材を育て上げ、人類に貢献することが大事だと思います。

優れた発見や技術の確立を日本国家は目指すべきでは無いでしょうか。

日本住血吸虫宮入貝感染実験当時の思い出

巨摩共立病院名誉院長(内科医師)加茂悦爾

私は昭和31年に信州大学を卒業、昭和32年に山梨県立病院第一内科に勤務しました。

当時の肝硬変末期患者の治療法は、腹水除去のみでした。

巨摩共立病院は、甲府盆地西側の南アルプス市桃園に所在します。ここに私が来て間もない昭和42年に、山梨県で「地方病(日本住血吸虫病)の神様」と言われていた杉浦三郎博士との出会いがありました。同先生から「今までの仕事をまとめて学位を取りなさい」と勧められました。私は故郷で開業医になる積りでいたので学位取得は念頭にありませんでしたが、卒業後十年にして母校の病理学教室の研究生になりました。そして毎週金曜日に大学に通い「日本住血吸虫

性肝硬変症は自己免疫疾患か？」という仮定のもと、数年間の動物実験に携わる事になりました。それには寄生虫学と順応生化学両教室の絶大なご支援を頂きました。その結果、昭和49年に同症の「免疫病理学的研究」により学位が授与されました。

巨摩共立病院は職員数約千名の公益法人山梨勤労者医療協会の一病院で、その旧伝染病棟を改築して本県における難病解明のために山梨医学研究所が昭和52年に開設されました。その目的は、本県で高死亡率の肝硬変・肝がんは日本住血吸虫やブドウ酒に起因するのではないかを、更にリュウマチの病因も解明する事にありました。草野信男元東大病理学教授を所長とする

この研究所は病理・生化学・寄生虫の三部門から成り、二台の電子顕微鏡や冷暖房完備の動物飼育室などがありました。私は研究所前庭の一角に宮入貝飼育池を設置し県予防課地方病科米山係長の協力や、研究所職員数名の協力により集めて来た貝をその池で飼っていました。

私が急性日本住血吸虫症患者を診察したのは、昭和38年が最初にして最後でした。昭和40年ごろから本県における検便の虫卵検出率は激減し、本症の診断には皮内反応と直腸生研が不可欠となりました。学位取得後も私の研究は続き、諸種の実験動物を飼育しました。宮入貝感染法、皮内反応試薬の作成、COP検査などには、国立予防衛生研究所や山梨県立衛生研究所の大きな協力をいただきました。

残念ながらこの法人は、昭和58年に130億円の債務超過をもって倒産し、研究所は閉鎖され、私の研究生生活は終わりました。

診療生活に移って14年後の平成7年に、債務は七千人の債権者に全額返済され、その翌年に私は退職しました。

私自身にとって実体顕微鏡下に観察し得た宮入貝感染状況は驚きであり、これを8mm映画に撮って置きました。このフィルムは昨年二月に私が宮入慶之助記念館を訪問したことが機会となり、映像とともに説明を加えてデジタル化されたDVDとして生き返りました。

いくつかの大学で学生の教育や一般講演にも使われているようです。多くの方々に喜ばれた事は、偶然の事とは言え、私の望外の喜びとなりました。(2015.8.5記)

若き日に会ったミヤイリガイの思い出

椋澤 美佐子

ほんの偶然のことから、私は宮入博士の「日本住血吸虫中間宿主発見百周年」のこの年にミヤイリガイ(以下カイ)が発見者の宮入慶之助博士の名前から名付けられたことを知ることになりました。私は50年前、長崎の活水女学院短大を卒業した年に郷里の福岡県久留米市にある久留米大学医学部の病理学教室の研究補助員として仕事をすることになりました。教室は中島敏郎教授、塘 普助教授、川崎宏講師、助手、大学院生、そして若い女性5~6人の補助員の構成で、いくつかの研究室に分かれていました。今にして思えば教授・助教授共にまだ若く研究に忙しくして居られました。

それまでの私は、カイの知識も浅く、ジストマという病気に子供の時に罹ると背丈が伸びずにお腹が大きく膨れるそうなど言う程度でした。実際には兄の高校時代の同級生が宮ノ陣の出身で、背が低いのはこの病気によるものと聞いていました。小学生のころには筑後川での遊泳は禁止されていました。

病理学教室では梅雨明けすぐの頃に、教授をはじめ教室全員総出でカイの採取に出かけたのが、ついこの間のことであったように思い出されます。採取地は大学から近く、宮ノ陣からは少し下流の水天宮や梅林時の裏を流れる筑後川の河川敷でした。何台かの車に分乗して私たちは白衣姿にゴム長靴、実験用の

薄い手袋、ピンセットに試験管(この中に貝を入れる)を手に、まだ若いお年頃で夏の日の陽焼けを気にして大きな麦わら帽子を可愛くかぶって行きました。目を凝らして探しても光沢ある数ミリの濃い茶褐色の巻き貝は容易に見つけることができませんでした。全部を集めると、それなりの収穫はあったのだと思います。貝は大学院生や助手の先生方によって乳鉢ですり潰して顕微鏡を覗いて数をかぞえて居られたので私達は卵の数とっていました。それは「セルカリア」の数であったと思われます。私は結婚のため東京都目黒区で過ごしてきましたが、老後の生活は古里の地での思いが強く子供たちの快諾を得て、去年の秋、櫨の樹が紅葉で真っ赤に染まる絶景の久留米市の耳納連山の裾野に住み替えを決めました。すると、病理学教室の当時の仲間が40数年ぶりの再会を喜んで大分県の別府温泉に一泊を計画してくれました。みんな気持ちは当時のままでカイ採取のことを良く覚えていました。塘先生の研究室に居た友の話によると、先生の車で現地近くへの送り迎えで何度か採取に行き、その貝を先生はひとつひとつ調べて「これはカイとは違うばい」「こりゃホウゼたい」と言われるが彼女には見分けがつかなかったとか、先生の書かれた「日本住血吸虫症」の原稿を読みやすく清書したなど、全て若い日の思い出です。

当時の筑後川の堤防には春になると菜の花が土手一面を黄色に染めてそれは美しい光景でした。今は護岸工事が進んで一部の河川敷はゴルフ場などになっています。

筑後川は平成 12 年に終息宣言を発表し、カイの最終発見地となった久留米市宮ノ陣には「宮入貝供養碑」が建立され人為的に絶滅に至らしめられたカイの霊を吊っています。

宮入博士の存在を知らないで、カイに少しでも

係っていた事を 50 年後に知ることとなり大きな驚きでした。

カイ発見が日本住血吸虫対策にいかに重要な出来事であったか、この功績の偉大さに深甚なる敬意を表したいと思います。そして記念館の今後ますますのご発展を祈念いたします。最後に、この投稿につきお世話になった行本達男様にお礼申し上げます。

記念館活動記録(平成 27 年 7 月以降)

□ 8 月 8 日夜、館長が記念館の地区会員との打合せ会の帰路、農地に転落し長野松代総合病院へ緊急入院しました。右足の骨折で手術を受け、10 月 1 日に退院しましたが心臓の不整脈による発作を発症、10 月 2 日に再入院しペースメーカー植え込み術を受け、17 日に退院しました。

リハビリテーションを続けながら、徐々に記念館活動に復帰しています。

□ 10 月 4 日、記念館所在地区の岡新明神社の秋祭に協賛し、子供神輿の榮譽礼を受けました。館長は入院中でしたが、地区会員の多大のご支援により無事終了しました。

寄贈書籍・資料紹介

□ 「日本住血吸虫症－特に脳症型・肝脾腫方を中心に－」(林 正高著、三恵社刊、平成 27 年 12 月)

市立甲府病院神経内科元科長で当館会員である林 正高氏が日本住血吸虫症の臨床医として日本国内はもとより中国および比国の多くの患者の治療にあたられた記録をまとめた本が発刊され、当館に寄贈いただきました。

日本でのこの病気の撲滅には、患者と接し治療に奮闘された臨床医の活躍が欠かせなかったと思います。この本はその記録として貴重な収蔵品です。

□ 「西日本皮膚科」日本皮膚科学会西部支部(平成 27 年 10 月)

東京大学大学院総合研究科の石原あえか氏が皮膚科で使われたムラージュ(患部の標本)を主題としての「皮膚科ムラージュをめぐって 医学と芸術の邂逅(2)」という論文を執筆され、掲載誌を寄贈いただきました。同氏は昨年春に、日本における皮膚科の祖といわれる土肥慶蔵と帝国大学予備門で同級だった宮入慶之助との関係で調査のため来館されました。何回も来館され、熱心に調査され、論文の中では当館について紹介して下さいました。

ご支援へのお礼 (順不同、敬称略)

次の方々からご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

[基金] 相川 勝弘、清永 孝、高橋 孝雄、石井 丈二、高橋 優三、小野 渉、丹羽 保明
福田 初江、秋山 文夫、和田 完一、田中 和子、山本 睦子

[寄贈] 多田 功、林 正高、石原 あえか

お知らせ

宮入慶之助が長野市松代町西寺尾に生まれてから昨年(平成 27 年)で 150 年になります。

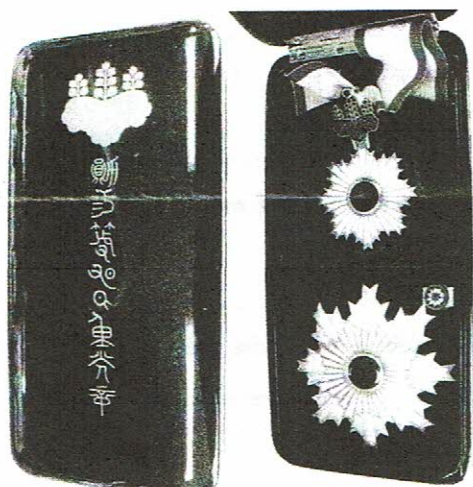
これを機会に生誕地周辺の関係各界の皆様をご招待し、「宮入慶之助博士生誕 150 年式典」を開催いたします。日本住血吸虫症撲滅までの歴史における彼の功績を再認識するとともに、

今後も患者の発生が無いこと及び海外の有病地での患者がゼロになることを祈念したいと思います。開催日時は平成 28 年 6 月 4 日(土)午後 3 時より 5 時まで、場所は「信州そば蔵」長野店です。参加を希望される会員は事務局までご連絡ください。

新規収蔵品紹介

記録によれば、宮入慶之助の功績に対して大正11年に勲二等瑞宝章が、昭和3年に勲二等旭日重光章が授与されています。これらの勲章は終戦後の混乱のために散逸して今は無く、授賞記念写真だけが残されています。調べてみると勲章そのものの材質・形状は同一であり受賞者についての情報は勲記(賞状)に記録

されており勲章そのものはどれも同等品と考えて良いことがわかりました。彼の功績についての展示をより効果的にするために、同等品を探していたところ、昨年9月に長野市内に勲章を収集している方がおられることがわかり、入手し展示に加えることが出来ました。



旭日重光章



瑞宝章

編集後記

□昨年は、不覚にも長期入院をしなくてはならない事態となり、会員の皆様にご迷惑をかけたことを深くお詫びいたします。昨年実施できなかった「生誕150年式典」を地区会員有志による実行委員会のご支援のもと開催いたします。よろしくお願いたします。

□入院中に姪が見舞いとして持ってきてくれた日経サイエンス誌9月号の記事で、東京大学出版会から「顧みられない熱帯病 グローバルヘルスへの挑戦」という本が出版されたことを知り、購入して読みました。巻頭言で多田名誉館長もふれておられますが、世界規模でのNTDの問題、その中でも17の重要疾患のうちの住血吸虫症は患者数では4位を占めていることなど、入院中貴重な勉強になりました。

□宮入聰一郎会員のお世話により、筑後川流域のミヤイリガイ撲滅対策の活動に従事されていた椛澤さんに当時の思い出を執筆いただきました。

中間宿主の発見から日本住血吸虫症の撲滅までに多くの関係者が努力・奮闘されたという記録の一つとして掲載させていただきました。蛇足ですが、文中で紹介されている「宮入貝供養碑」の碑文は、人間と自然を対立したものとしてとらえる西欧の自然観とは違って、自然とともに生きるという日本人の自然観を表現していて感銘を受けます。

宮入慶之助記念館だより 第23号

発行者

特定非営利活動法人 宮入慶之助記念館

編集者 宮入源太郎

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾 2322

Tel&Fax(事務局) 026(293) 3828

(記念館) 026(293) 4028

ホームページ <http://miyairikinenkan.com/>

発行日 2016(平成28)年3月31日